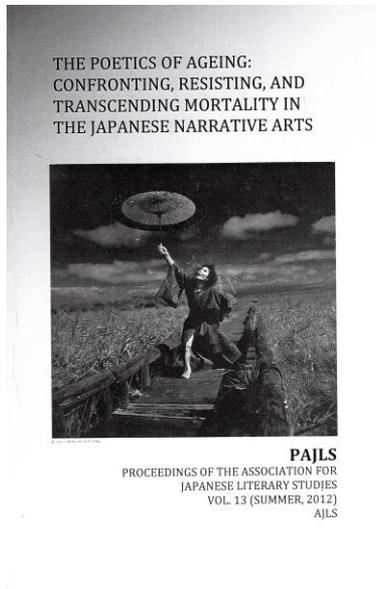


「現代詩にみる「山姥」の表象：吉原幸子とその他の女性詩人」

“The Yamamba Image in Contemporary Poetry: Yoshihara Sachiko and Others”

Mano Takako 

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 13 (2012): 68–79.



PAJLS 13:

The Poetics of Ageing: Confronting, Resisting, and Transcending Mortality in the Japanese Narrative Arts.

Edited by Hosea Hirata, Charles Inouye, Susan Napier, and Karen Thornber

現代詩にみる「山姥」の表象：
吉原幸子とその他の女性詩人
**The Yamamba Image in Contemporary Poetry,
Yoshihara Sachiko and Others**

Mano Takako
Josai International University

はじめに

戦後日本の女性詩人、石垣りん、茨木のり子、吉原幸子、大庭みな子、伊藤比呂美らの詩にみる「山姥」のイメージを読み解く。水田宗子が『山姥たちの物語』において述べているように、「山姥は、時代と文学の想像力によって新しい人物像へと形象され、テキストに書き込まれ、書き直されていくことを通して、現代までの物語の中に生き残り、女性の新たな生き方の哲学を担って蘇ってくる原型的存在であるといえるだろう。」¹ つまり、「山姥」は、昔話、伝承、民話の中でさまざまに語られてきただけでなく、現代においても女性表現の重要なイメージを託されたものなのである。そのイメージは現実の「老女」とは反対に、力強く、生命力にあふれ、恵みと災いをもたらし、生と死のあいまいな領域に存在する。本論文では戦後日本の女性詩人、石垣りん、茨木のり子、吉原幸子、大庭みな子、伊藤比呂美らの詩にみる「山姥」のイメージを読み解く。上記の女性詩人・作家たちは、作品の中で「山姥」のイメージを新たに創り出しながら、女性の老いや死をさらにはその理想を表現している。例えば、吉原幸子の最後の詩集『発光』にある「むじゅん」はその典型であろう。

とほいゆきやまがゆふひにあかくそまる／・・・
／わたしはまもなくしんでゆくのに／せかいが
こんなうつくしくては こまる／・・・／と
ほいよぞらにしゅうまつのはなびがさく／やは
らかいこどもののどにいしのはへんがつきささ
る／・・・／わたしはまもなくしんでゆくのに
／みらいがうつくしくなくては こまる！²

¹ 水田宗子, 2002, 9.

² 吉原幸子, 2003, 90.

このように、彼女たちは作品の中で「山姥」のイメージを発展させて老いと死についての哲学を提示している。本論文では現代詩における老いと死を多義的であいまいなメタファーとして意味の広がりを持つ「山姥性」の視点から考察したい。

1. 大庭みな子の「林」『山姥の微笑』: 母と娘の関係に見るメビウスの環

「山姥性」は母・娘の関係にもからみあいながら、「古い」と「死」さらには「不滅」をも含み、女性の生死を貫くメタファーを暗示する。大庭みな子の初期の詩作「林」では、「山姥」以前の「山姥」の萌芽が認められた。林での「山姥性」が育まれたとき「里」へと詩の声である「わたし」は生きる場所を移していく。

陽ざし、／貧しさを忘れたひととき、／白い桑畑にはありあまった平和があり、／休息に退屈した心には／運命を命令しようと決心し、／全ての記憶は誕生となり、／未知の期待は欲望と結婚する。³

「林」にいつも身を置いていた「わたし」は「白い桑畑」の「里」に来ていていると思われる。そこは、平和であるが、惰性で生きていかねばならない場である。「わたし」は「里」の女、つまり、人間社会の女として「愛」を経験する。しかし、そこには安住しては住めない。「山姥」と「山」が結びついているように、「里」に暮らしてはいても「林」を忘れることはないのである。そして、後の作品『山姥の微笑』において、成熟した「里」の山姥が完成されたのである。物語の中で「彼女は、正真正銘の、まがうことなき山姥だった」⁴と宣言されている。そこには、自分自身が死によって滅びようとも彼女の「山姥性」は母から伝えられたように娘へと受け継がれていき決して絶えることがないことを提示しているのである。しかも、皮肉なことに、山姥である母（彼女）は死ぬ直前まで自分の母も山姥であったことを悟ることができなかつた。それと同じように、自分の娘も母を山姥であると悟ることができないのであつた。物語の結末でヒロインは「多分、死んだ母親も、正真正銘の山姥であつたのだろう」⁵とつぶやく。この母と娘が理解しあわない関係

³ 大庭みな子, 2005, 22-23.

⁴ 大庭みな子, 1991, 54.

⁵ 大庭みな子, 1991, 63.

が「山姥性」の受け継ぎの実体なのである。

河野貴代美は、母・娘の関係を、フロイトのメランコリー理論を性別化の文脈で解釈・発展させたバトラーの『ジェンダー・トラブル』に依拠して、「母・娘のナラティブー愛着と分離のはざまで一」においてフェミニスト・カウンセリングの視点から次のように述べている。「母は存在したにもかかわらず存在しなかったという事実遭遇してしまう。そして、なぜこんなにも母は娘に密着し、娘が自分か自分が娘か不明なメビウスの輪の中に入ってしまったのか、母はなぜ与えられないのか、という根拠が忽然と姿を現す。母はすでに失われていたのである。」⁶大庭の「山姥の微笑」は、この理論の小説化とも読み取れるほど母・娘のメビウスの円環を描いている。しかも、「山姥性」をおびたものである。水田は

本性も仮性も、善も悪も、その境界があいまいな領域。大庭みな子の山をめぐる山姥は、あるときどこかへ姿を消してしまうが、やがてまたどこかに生まれ変わってくる。性といういのちの永劫性、回帰する情念を受けとめて、妄執と達観の間をめくりつつける山姥への想念は、女を規定し、枠組みにはめ込もうとするジェンダー化の仕組みをくぐり抜けて、自由で多義的でありのままで図太い存在へと達していく、理想としての、憧憬としての女の老いの形を描いているともいえるだろう。⁷

と大庭の山姥を総括している。

この母・娘の関係の「山姥性」を典型的に現代詩において表象している女性詩人に吉原幸子をあげることができるだろう。

2. 吉原幸子—『花のもとにて春』『発光』から

吉原幸子は母との関係が一般の母・娘よりも濃密であった。それは彼女の出生の事情が複雑であったことにもよる。母が家を出たときに生まれ再びともに家へ戻った。それゆえ実父とは疎遠であり、また、形式上の父も12歳のときに亡くなっており、父という存在が希薄な中で母娘だけの世界で成長していった。母の生き方が吉原の生き方を大きく運命づけたのである。それほど吉原にとって母の存在は絶対的であり、母が生きているときのみならず死んでからも

⁶ 河野貴代美, 2004, 154.

⁷ 水田宗子, 2002, 30.

中心的なものであった。いわゆる「母・娘の境界の不明さ」がきわだっていたと思われる。つまり、互いへの浸透性をもつことを意味する。したがって、母の老いをまじかに見つめることは自分自身の老いをも意識することになる。そのような詩に『花のもとにて春』からの「泣かないで」がある。

母よ母よ／たうとうあなたは間違へてしまった
 ／毎日みてゐる娘の顔を／・・・／わたしよ／
 鏡の中に 一本づつふえてゆくシラガを／そん
 なにもやすやすと じぶんにゆるすのなら／
 (まして) ／老いてゆく母をゆるさねばならな
 い／母が老いてゆくことを⁸

この詩の前半では、「わたし」は母が老いていくことに対して認めたくない、むしろ、ゆるせない気持ちなのである。母は常に「わたし」より強く導いてくれる存在でなければならない。「一度は母に一体化した娘は母を賞賛の対象とする。やさしく、有能で思慮深く見える母を愛し誇りに思う。」⁹しかし、今は娘の顔を判別できないほど精神的な老いも進行してきた。肉体的に母より優位にたつたときも少なからず悲しみを覚えた。まして、「わたし」の存在自体もわからなくなった母に対して悲しみよりも怒りの気持ちが湧いてくる。ところが、「わたし」ももう以前の「わたし」ではない。シラガは増えてくるし、もの忘れもひどくなるのである。そうならば、「わたし」は詩の後半で次のように悟るのである。

けれど今／あなたはわたしを もう一度追ひこ
 して／ずっと先の方へ 行ってしまった／あな
 たが三分で忘れることを／わたしだって三日で
 忘れるのだから／永遠のなかでは たいしてち
 がわかない¹⁰

つまり、母は老いることに関して「わたし」より優位にあるのだから、以前のときのように「わたし」を導いてくれる存在なのである。そうして、「わたし」は母をゆるすことができ、受け入れられるのである。

⁸ 吉原幸子, 2003), 8-9.

⁹ 河野貴代美, 2004, 155.

¹⁰ 吉原幸子 2003, 9.

母よ／時間が夢のやうに流れて／いとしいものが
 ごちゃまぜになって／うらやましいわ／泣
 かないで／／ほらわたしのシラガをぬいてくだ
 さい／いつものように¹¹

と結ばれて詩は終わる。母の老いに衝撃を受けたが、「わたし」の老いも「永遠のなかでは」同様であり、むしろ、老いの時間の流れと記憶の渾然を肯定的に捉えるのである。母は吉原の存在を愛の記憶として自分の生きる根拠としていたが、自身の存在の証しとなる記憶さえ失いつつある。しかし、世間の生活を超越した母の老いの生き様は吉原に確実なメッセージを託した。母の老いにかかわるまで吉原は老いに対して肯定的に受けとめることができなかつた。そして、「泣かないで」の前半で表されているように母の老いを悲しみで捉えていた。しかし、後半ではその悲しみが肯定へと転調するのである。時間の流れと記憶の渾然がもたらす老いの境地が理想として母により示されたことが、「山姥性」をおびた母・娘のメビウスの円環を暗示しており、大庭の『山姥の微笑』と通底する。そして、その母・娘関係は、生きている間で決して理解しあえない『山姥の微笑』の母・娘関係ではなく、母の「山姥性」を娘が確かに受けとめるのである。

最晩年の詩集『発光』からの「帰巢」では、ジェンダー規範の人間社会を超えていのちの原風景が見えてくる。ここに、居場所をメタファーとする「山姥性」が認められる。山姥の居場所は字義通りの山とは限らない、ジェンダー規範が及ばない場所のメタファーが山姥の居場所なのである。吉原の場合は山の山姥というよりは海の山姥と表現するのがふさわしい。

さわがしい この惑星を／このあたりで停めて
 ください／ここからは歩いて帰らう はだして
 ／水っぽい むかしの地球まで¹²

という書き出しで始まり、

ヒトに生まれたいのちを あんなふう／ひっ
 そりと 素朴にすごしたかった／深い海の底で

¹¹ 吉原幸子 2003, 9-10.

¹² 吉原幸子, 2003, 89.

／エイは エイに生まれたいのちを／オオカミ
 ウオは オオカミウオに生まれたいのちを／だ
 まって引き受けてゐるやうに¹³

このように、人間＝「いのち」を「ジェンダー構造の外部」で捉え、人間ばかりではなくあらゆる「いのち」を慈しみ、地球を惑星レベルにおいて俯瞰する「詩の声」の広がりや深みを提示している。ところが、続く詩句では、

けれど／のび放題の草むらにかくれた巣穴に帰
 りつく／きのふは 砂糖にむらがったアリを
 つぶし／けふは 身ごもったゴキブリをたたき
 ／遠い国のいくさに目をつむり／役にも立たな
 いことばをつぶやき¹⁴

というように、現実の「わたし」はまったくの俗な生活を過ごす。山姥性とはかけ離れた存在である。しかし、次の結句において、

〈ダルマサンガコロンダ〉／と 十かぞえては
 幼いわたしが振り向けば／次のオニは その度
 にぴたりと止まりながら／しなやかな速さで
 すぐ近くに迫ってきてゐる¹⁵

のである。「泣かないで」の中で母が経験していた「時間が夢のやうに流れて／いとしいものがごちゃまぜになって」いる「わたし」が現れる。山姥性をおびた母・娘のメビウスの輪は確実に「わたし」に受け継がれていた。だから、「急がなくては／急いで 海へ戻らなくては／／さうして 懐かしい地球の／小さいのちの 大きな円環に加はって／ガラスの風鈴に／耳を澄ましてゐたい」¹⁶の結句で言うように、吉原の山姥は地球のいのちの源である海があるべき場所なのである。そこは「小さいのちの 大きな円環」が示唆している山姥の豊饒性のメタファーである。同詩集からの「きおく」にも「ゆめのなかのはは は／じぶんがしんだことをまだしらない／それとも あちらのゆめのなかに／こちらが まぎ

¹³ 吉原幸子，2003，89.

¹⁴ 吉原幸子，2003，89-90.

¹⁵ 吉原幸子，2003，90.

¹⁶ 吉原幸子，2003，90.

れこんでみたのか／（うみのきおく きおくのうみ）」¹⁷とあり、母・夢・記憶・海との渾然とした表現に山姥性の母・娘のメビウスの環がさらに発展して認められる。

3. 世代による山姥のエクリチュールとその継承:石垣りん 茨木のり子 伊藤比呂美

石垣りんと茨木のり子は吉原より一世代上の詩人である。つまり、彼女たちは戦後の男女平等の教育を受ける前に成人していた。彼女たちは戦前の女子教育や男尊女卑のジェンダー社会において身につけた女性としての縛りを自分たちの詩作において振りほどいていったのである。この点で、吉原の世代とのエクリチュールの違いが現れる。ある意味、石垣と茨木の詩は完成されたエクリチュール・フェミニンといえる。そして、ヴァージニア・ウルフのいう「自分ひとりの部屋」をエクリチュールの中で獲得した。一方、吉原らの戦後民主主義の男女平等教育を受けた世代は、Felman Shoshana が「女として読むこと書くこと」の難しさについてジェンダーのトラウマから言及しているように、そのエクリチュールは逆説的ながら単純に女として表現しにくいものになってしまったといえる。

I do indeed endorse the necessity—and the commitment—to “exorcize the male mind that has been implanted in us.” But *from where* should we exorcize this male mind, if we ourselves are possessed by it, if as educated products of our culture we have unwittingly been trained to “read literature as men”—to identify, that is, with the dominating, male-centered perspective of the masculine protagonist, which always takes itself—misleadingly—to be a measure of the universal?¹⁸

「シジミ」は石垣の詩作の特徴を顕著に表している。自分の生活に根ざした感覚を持ち、鋭い批評眼とユーモアで現実を詩の表現

¹⁷ 吉原幸子, 2003, 101.

¹⁸ Felman, 1993, 5.

にまで高めるのである。詩を構成している言葉はわかりやすい。しかし、表現された内容は孤高の人間のみが知るものなのである。「夜中に目をさました。／ゆうべ買ったシジミたちが／台所のすみで／口をあけて生きていた。」¹⁹と始まるこの短い詩はユーモアを感じさせる。女の生活の場面で出会うひとこまである。次に続く「夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」／／鬼ババの笑いを／私は笑った。」²⁰では、山姥が人を喰らう場面を想像させ、おかしみさえ漂う。しかし、次の結句では「それから先は／うっすら口をあけて／寝るよりほかに私の夜はなかった。」²¹と詩の転調がある。「私」は「シジミ」のように口をあけて逃れようのない現実の世界に喰らわれる存在なのだと潔く観念する。「寝るよりほかに私の夜はなかった。」とは、厳しい現実の生活から逃れようとしない、むしろ、引き受けようとさえする「私」の矜持なのである。そのかわり、「私」は詩を書くことによって「自分ひとりの部屋」を獲得しようとし、そこは誰にも侵されてはならない。この決心が「表札」に結実している。

自分の住むところには／自分で表札を出すにかぎる。／・・・／やがて焼場の鐘にはいると／とじた扉の上に／石垣りん殿と札が下がるだろう／そのとき私がこぼめるか？／／様も／殿も／付いてはいけない、／／自分の住む所には／自分の手で表札をかけるに限る。／／精神の在り場所も／ハタから表札をかけられてはならない／石垣りん／それでよい。²²

病気で入院しても、やがて、老いて死に焼場で焼かれるときも石垣は「自分ひとりの部屋」を希求した。そこは石垣にとって過酷であった現実社会の「ジェンダー構造の外部」にあって、誰にも名づけられない処である。石垣の山姥性はこのような孤高の強靱さを持っている。

茨木のり子も石垣りんのように「自分ひとりの部屋」を求め続けた。「寄りかからず」では、あるゆる権威からの独立精神性を今

¹⁹ 石垣りん, 2005, 68.

²⁰ 石垣りん, 2005, 68-69.

²¹ 石垣りん, 2005, 69.

²² 石垣りん, 2005, 70.

までの総決算として宣言している。

もはや／できあいの思想には寄りかかりたくない
 もはや／できあいの宗教には寄りかかりたくない
 もはや／できあいの学問には寄りかかりたくない
 もはや／いかなる権威にも寄りかかりたくはない
 ながく生きて／心底学んだのはそれぐらい
 じぶんの耳目／じぶんの二本足のみで立っていて
 なにや不都合のことやある／／寄りかかるとすれば
 それは／椅子の背もたれだけ²³

茨木は「ながく生きて」、独立精神性を獲得したことを高らかに宣言する。茨木の山姥性はあるゆる権威、つまり、「ジェンダー構造」からの独立精神性をメタファーするものなのである。それは、女性として守られるための制度を自ら放棄することであり、まさに、山姥が女として安住できる「里」を捨て自らの力で生きぬかなくてはならない「山」を選ぶことなのである。

伊藤比呂美は吉原幸子より一世代後の詩人である。吉原らの世代がフェミニズムを知らず、自らの詩がフェミニズムのテキストとなったのに対して、伊藤らはフェミニズムを既存の事として経験しながら詩作してきた。したがって、そのエクリチュールは吉原らとは異なるものであり、タブーとされていた女の性に関する体験を言語化した詩やエッセイという表現で発表して多くの同世代からの支持を得ている。「里」の女としての規範である異性愛や子供を生むことを逆説的かつ戦略的に従い、女の身体性とセクシュアリティを過剰なまでに主張して、ついには「里」の規範を越境してしまうのである。ここに、伊藤の詩表現の根本において「山姥性」に通底するものが認められる。近年はアメリカに在住しながら日本の老いた両親の介護のために日米間を頻繁に往復している。遠距離の介護はますます困難になっていき、自分の家族にもいろいろと問題をかかえながらの詩作であった。それが『とげ抜き新巢鴨地蔵縁起』である。この詩集の語りは「説教節」といわれる江戸の近世からの「詩の声」を基調としているのだが、語られる内容はまさに時事問題そのものなのである。その中から「伊藤ふたたび絶対絶命、子ゆえの闇をひた走る事」をみると、家から離れて大学に行ってい

²³ 茨木のり子, 1999, 58-59.

る娘たちが摂食障害であるらしい。自分が娘であったときのように。娘たちの訴えを電話で聞いてやることしかできない。かつて、自分も父や母に聞いてもらったのである。

あゝ怖かった怖かった。／わたしは声に出して
 行ってみました。／あゝ怖かった怖かった。／
 たらちねの母といえども生身であります。／む
 かしは小さな女の子でありました。／怖いとき
 には泣いていました。／父や母や夫や王子様に、
 助けてもらいたいと思っておりました。／何べ
 んも何べんも助けてもらいました。／父にも母
 にも、夫や王子様にも。／でも今はだ一れもお
 りません。／父は老いて死にかけです。／母も
 死にかけて寝たきりです。／夫や王子様には、
 もう頼りません。／このごろじゃすっかり垂れ
 乳で、根元からゆあーんゆよーんと揺すれるほ
 どになりまして、／足を踏ん張り、歯をくいし
 ばり、／ちっとも怖くないふりをして、／苦に、
 苦に、苦に、／苦また苦に、／立ち向かってき
 たんですけど、／あゝあ、ほんとに怖かったの
 でございます。²⁴

ここには、母・娘の苦しみがメビウスの輪のようにつながり、さらに、父母の老いと自分自身の老いの痛みも重なり、「絶対絶命」の状況なのである。その母・娘関係は大庭の『山姥の微笑』とくらべれば、フェミニズムを通過してきている世代であるので、少なくとも娘の痛みを共感できるのである。しかし、老いた父母に以前のように頼りたいという未練を捨てきれず、自分自身の苦しみを自ら引き受ける覚悟を得るまでには至っていない。「伊藤病んで、鳥花に変じ、巨木はべつに何にも変わらぬ事」の最終章にいたると「生きている」こと自体に希望がみえてくる。ペットで飼っていた「オカメインコ」の死と「雀犬」の事故が「みがわり」になって「家族の苦」から救ってくれたのではないかと思えるのである。「とげ抜き地蔵」が「みがわり」になってくれるように、苦しみの根本的解決ではないが、小さな痛みを癒してくれるのである。そして、小旅行で訪れた深山の巨木を前にして、次のように悟る。

²⁴ 伊藤比呂美, 2007, 223-24.

わたしは認識する、それを、／自分はみぢんの存在であると、そして／わたしは信じる、この巨大な存在を、／わたしは信じる、苔々を、緑々を、／わたしは信じる、ごはんのひとつひとつに宿る精霊を、／私は信じる、人の善意を、犬の善意を、／わたしは信じる、煙を、／わたしは信じる、「とげ抜き」の「みがわり」を、／わたしは信じて、そして認識する、自分は、／この巨大な存在のひとつになり、ちらばった、／みぢんの存在である、とわたしは夫に申しました。²⁵

幹にやけどの痕が多くある巨木の壮絶な姿に「わたし」は圧倒される。そのやけどの痕は「とげ抜き」の痕に通じるのである。そして、「わたし」は救われた思いを感じた。巨木が想起させる壮絶な老いに対する覚悟はまだないだろうが、山の自然の「この巨大な存在のひとつとなり、ちらばった、みぢんの存在である」と認識する。伊藤の山姥性は、「里」の現実生活を娘・母・妻として懸命に生きながら、精神と身体を「里」の外へと越境していく。それは、「山」を本来の処とする大庭の『山姥の微笑』と共鳴している。伊藤のほうがより現代的に書き直され、老いや死に対する覚悟は大庭の山姥性までには達していないが、大庭の提示した現代女性の山姥性なるものは伊藤の『とげ抜き 新巢鴨地藏縁起』において書き重ねられ、さらに、多面性を与えられているのではないだろうか。

まとめ—山姥の表象と老いの哲学

以上で現代女性詩人の山姥の表象を概観してきたが、それぞれの詩人によって、その山姥像はそれぞれある。吉原幸子の場合は母・娘のメビウスの環が海という地球の小さなのちを育むメタファーにまで昇華された。石垣りんは誰にも名づけられない「自分ひとりの部屋」へと収斂されていき、茨木のり子はあらゆるものからの独立精神性を希求した。そして、伊藤比呂美は大庭みな子の「里」の山姥を現代に書き直したのだった。どの山姥像も水田のいう「ジェンダー構造の外部」であり、その豊饒なメタファーであることが共通しているのである。それは、取りも直さず女の「老い」の哲学

²⁵ 伊藤比呂美, 2007, 285-86.

であり、また、理想像でもあるだろう。

参考文献

石垣りん. 『現代詩手帖特集版 石垣りん』. 思潮社, 2005.

伊藤比呂美. 『新巢鴨地蔵縁起』. 講談社, 2007.

茨木のり子. 『倚りかからず』. 筑摩書房, 1999.

大庭みな子. 「山姥の微笑」『大庭みな子全集』第3巻. 講談社, 1991.

_____. 『大庭みな子全詩集』めるくまーる, 2005.

河野貴代美. 「母・娘のナラティブー愛着と分離のはざままで」. 『岩波 応用倫理学講義 5 性／愛』. 金井淑子編. 岩波書店, 2004, 140-60.

水田宗子. 「山姥の夢—序論として」. 『山姥たちの物語』. 水田宗子他編. 學藝書林, 2002, 7-37.

吉原幸子, 『続続・吉原幸子詩集』現代詩文庫 172. 思潮社, 2003.

Felman, Shoshana. *What Does a Woman Want? : Reading and Sexual Difference*. Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1993.